

Title	(随想)詩人と尿閉
Author(s)	稲田, 務
Citation	泌尿器科紀要 (1962), 8(8): 449-450
Issue Date	1962-08
URL	http://hdl.handle.net/2433/112341
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

泌 尿 器 科 紀 要

第 8 卷 第 8 号

昭和 37 年 8 月

随 想

詩 人 と 尿 閉

京都大学教授 稲 田 務

本誌 7 月号の巻頭随想欄に 細田寿郎博士が 故 詩人室生犀星氏の著書「われはうたえども やぶれかぶれ」の中に 尿閉に苦しめた事が書いてあると紹介せられたので 私も一本を購つて これを読んでみた。これの書いてある一篇は70余頁の長さで 自宅や病院における病状を 詩人 小説家らしい観察によつて こまごまと 綿密に 書き綴つてある。異常神経らしい感覚もあるが 又鋭い 正確な直感もある。これほどの病苦の中で これほどの詳しい 長い記述が よくも出来たものだと思う。このような種類の文章 異常に鋭い感覚を持つ老詩人が 尿閉の堪えがたい苦痛についての体験を記した文章は 泌尿器科医としての自分に深い感懷を催させたのである。然しそれは 特に学問的に有益であつたと云うような事よりも やはり情動的にと云うか或いは人生的にと云うか そう云う意味で感慨が深かつたのは当然の事であろう。それで その内容をここに紹介するとしても 学問上に参考になる程の事はなく むしろ とりとめのないような事になるであろう。又 ところどころを抜き書きして それを読んで貰うよりも 購つて通読される方が感銘は大きいに決つてゐる。然し それはそれとして 心にとまつた所を抜き書きしてみようと思う。故人の霊が それを許される事を望む。先ず 60日程も何も書かずに うつらうつらと寝るにまかせていた後に この文章が書き始められたとの事。「日が暮れ夜も 9 時になることが怖い 遅鈍な尿意がもよおしてそのために 1 時間か 1 時間半ごとに 起きてはばかりに行かねばならなくなる。それも尿量の放出があればいいのだがつんぼのように悲しい閉尿の待ちぶせに合うのだ。なんとしても出ないのだ。出てもわづかばかりのしづくしか出ないのである。それでもよろこびとしなければならぬ。他人を騙すやうに私はいまおしつこなぞしたくないのだと呟く。おしつこがしたい奴はべつに庭の中をうろついてゐて 犬のように昨日自分でしたところに踞んで 山に穴のあくほど咳をしているあいつのことをいうのだ。此処にゐる私は出ても出なくともちつとも かかわりのない処にゐる人間なのだ。頭はれいろうとしてゐるし尿の事には無関心なのである。私はまったくおしつこなぞしたくないんです 苦情は先刻此処に跨つてゐて いまも庭をぶらついてゐるあいつの云分なんです その証拠には私はもう帰りがけてゐるくらいです さつぱりと快い気分になつてあるだけの重い残尿を放出して あなたの処からかるがると出てゆかうとしてゐる。あなたの真白なお腹は私をうけつけてくれなくとも それはどうでも宜い どうでもよいのだがちよつとだけさせてくれませんか。ちよつと些んのしづくでもそのお腹のうへに出させてくれませんか。私の全身は蒼ざめ此処で最早あなたに跨つてゐられないくらい 困憊しきつてふらふらになつてゐるのだ。ほんとうのことを云へばさうなのだ。どんな大切な物と交換してもよいから ちよつとだけ

普通の人間のやうに小便させてくれませんか。これは今夜のねがひなのだ。今夜のねがひは後ろに何十年もやつて来た果の果のねがひなのだ。だが閉尿は固く遂に私の膝がしらも腰もしびれ扉につかまりながら私はやむなく廊下に出て行く」 だいぶ長く引用したが この調子でまだまだ続いてゆく 寝所にはいつてからまた起き出して 縁側や部屋を通つて便所へ行く。30分ほど居ても尿が出ないので 庭に出て石垣の下で試みる。寒い夜でもこれを繰り返す 部屋の中で しびんにはどうしても出ない やがて夜が明ける。庭の石垣に踢むと辛うじて出るのだ。咳の苦しさと共に一服のうまさについても書かれている。軽井沢から東京への汽車の中で 度々はばかりへ通う苦しさも書かれている。次で大病院へ入院する事になった。「此処ではにわかになつたつていいや 此処は患者という名の意志のない奴の寝ころがつてゐる一つの断崖なのだ。此処から転がりこむところは決つてゐる——私はここでは手押車に乗るやうになり それが私が重症の人間に早がはりしてゐるのだ。足の乱れも大したことのない私は仮病をよそはうてエレベーターで降下してゆく。一階に泌尿科があつてその診察室の前で車が停つた。私は一人の医師の前に腰を下ろしたが 医師は普通の声よりもやや大きめに突然に冒頭から私を驚かした。『今までに淋病をしたことがあるかどうか』 私はかつてこのような無礼な訊問を受けたことがなかつたので 却つて物しづかにさういう経験はないと答へた——肛門からの触診のあとでは 不意の衝撃で寝台の上に起き上げられないでゐた。腰をへし折られたあんばいだつたのだ。看護婦がこの気の毒な百姓家のオヤヂか何かに似た奴の背中に手をささへそつと力を貸してくれなかつたら私は少時そのままでもたかも知れなかつた。彼女は泌尿科にゐる人でないおだやかさでお起きになれますかと云ひ私は大丈夫起きられますと答へて 起きて寝台から下りた。人間は妙なところで相手の知らないしんせつを受け取ることがあつて 私はそれをどう云ひあらはさうかと思つたが ただ 頭を下げただけであつた。思ひがけないものがやつて来て心を柔げるものだ」 地下室のコバルト放射室にて治療を受けるのが辛かつた由、同病らしい老人患者の勝手気儘な振舞に神経を尖らすと共に腹を立てた。初めてカテーテルが尿道に挿入せられて膀胱の洗滌が行われた時の火のような痛みとその時の看護婦のやさしさ。持続カテーテルは極度に拒否し続けたが これを行わなかつたら排尿は入院以前と変らぬと云われて 次第にその指図に近よる事になつた。然し一方には逃げ出す決心もしていた。結局はカテーテル挿入が行われた。固定された。貞操帯に似ている。膀胱に触る先端の痛みが耐えられない。引き抜きたいと思つた。ひとりで抜けていた。1時間でもこのまゝでいてやろうと思ひ黙つていた。某博士は カテーテル挿入の苦痛は なれてしまえば入歯と同じであると云つた。自分はカテーテルの中止を願つたところ 主治医はやさしくて これを許してくれた。退院と云う事になり 3人の看護婦から自分の著書に署名を求められた。もつと早く云つて呉れればと云つたら 彼女らは 仕事と私事が一しよになるのでと云つた。もつと詳しく色々の事が書いてあり 書き出せば切りがないが 私はその根気の強さに感心すると共に 患者の心理状態に就て教えられるところが多く 殊に泌尿器科の医師にとつて めずらしい説物であると思つた。